

自然博物館
ニュース

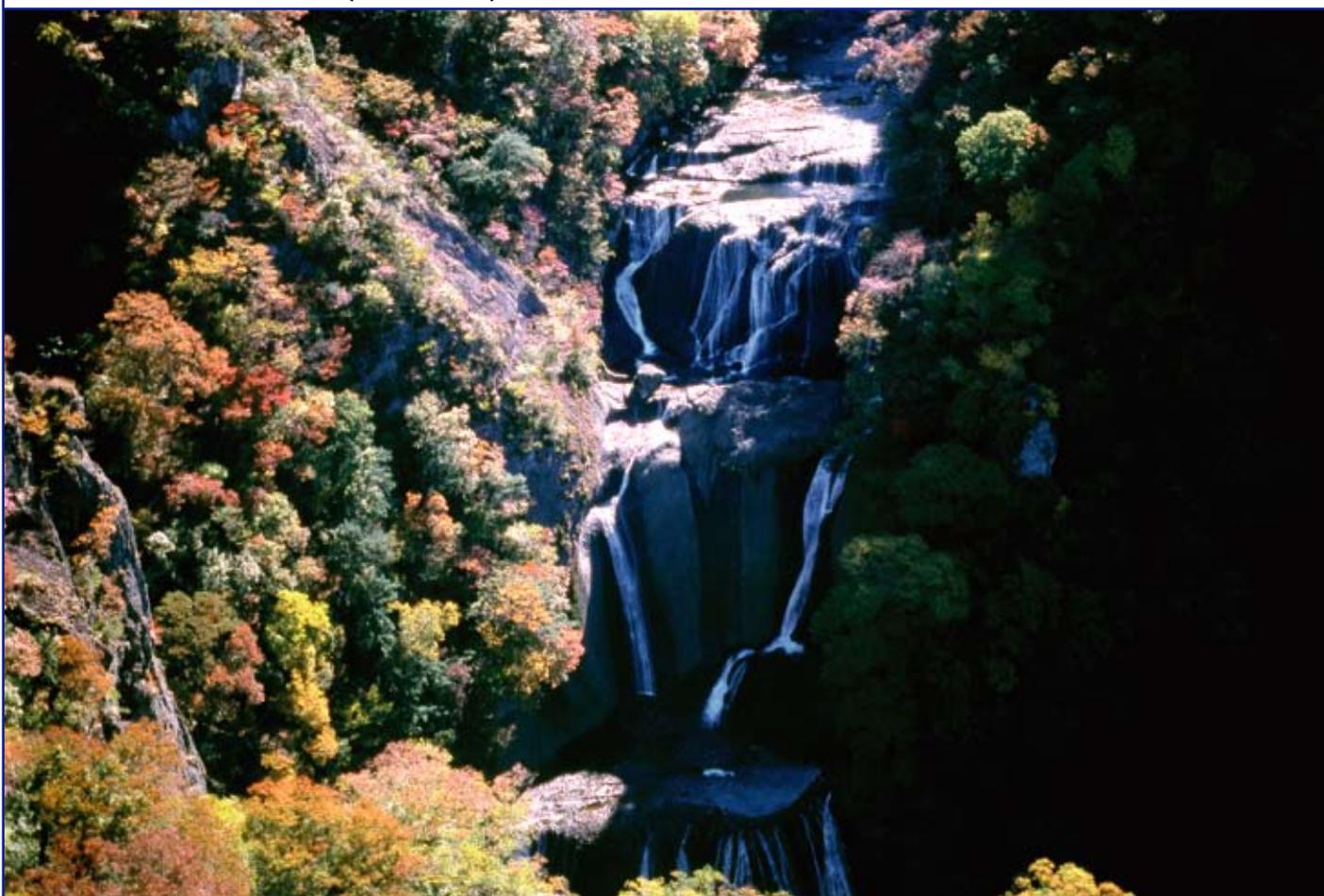
A・MUSEUM

vol.52
[2007.9.25]



ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



袋田の滝（空撮）



月待の滝（撮影：滑川敏行）

滝の形は石の硬さが決め手

滝がその姿を維持するにはいくつかの条件があります。滝を形作っている岩石が硬いこと、上流から流れてくる小石や砂が少ないことなどがその代表的な条件です。茨城県久慈郡大子町にある袋田の滝や月待の滝はたいへん硬い岩石からできています。それは海底火山の噴火によってできた火山角礫岩とよばれるものです。この岩石ができたのは今からおよそ1200万年前、日本付近で火山活動が活発におこり、日本海が形成された頃のことです。袋田の滝では、流路にあった泥や砂が固まってできた軟らかい岩石は水のはたらきで削られ、硬い岩だけが残って現在のような形になりました。周辺に残された泥や砂からできた岩石からは熱帯にすむ貝などの化石が見つかっています。美しい滝の姿を見るとき、その成因にも思いをめぐらせてみてください。

（教育課 滝本秀夫）

第41回
企画展

ミヤマスカシユリの薫る里

—久慈川の流れにのって—

茨城の自然を探る 総合調査報告

The 4th General Research : Nature of North-Western IBARAKI

ミュージアムパーク茨城県自然博物館では、1994～2005年の12年間をかけて、茨城県全域で第1～4次の総合調査を実施してきました。この企画展では、2003～2005年の3年間をかけて行われた第4次総合調査について報告するとともに、12年間で県内を一回りした総合調査を振り返りながら茨城県の自然を再発見したいと思います。



ミヤマスカシユリ

(撮影：大津昭治)

第4次総合調査のエリアは茨城県北西部の地域で、久慈川の流域と一致します。県内最高峰の八溝山(1,022m)に源を発する久慈川は、この地域に県内で最も変化に富んだ自然を育み、多くの景勝地をもたらしました。観光地としても有名な袋田の滝周辺の山地をつくる火山角礫岩の山肌には、全国でもこことほかに数カ所で見ることができないミヤマスカシユリが、香しい花をひっそりと咲かせます。また、フクロダガヤはこの地ではじめて発見された植物で、茨城県と栃木県の限られた場所にしか分布していません。溪流にヤマセミが舞い、トワダカワガラやムカシヤンマの幼虫が生息するのもこの地です。

第4次総合調査では、維管束植物1,404種、蘚苔類251種、海藻類45種、珪藻類113分類群、微細藻類157分類群、地衣類136種、菌類286種が記録されました。また、哺乳類や両生・爬虫類、トンボ、チョウなどの生息状況が明らかになってきました。どんな種類の土



いばらき自然環境フォトコンテスト第5回入選「鮎釣解禁」(撮影：小高紘佑) 壤動物が生息するのか、いろいろな分類群で調査されたのも特徴的です。大沢川の河川敷では、この調査の中で動物の足跡化石も発見されました。この化石は、1670万年前のシカの足跡と推定されています。

12年間の総合調査を振り返ると、さまざまな発見もありました。筑波山でツクバムラサキトビムシとサカヨリムラサキトビムシが新種として発見されたのは、大きな成果の一つです。クロコノマチョウ、ムラサキツバメ、ツマグロヒョウモン、ナガサキアゲハなど、今まで茨城県で生息していなかった南方系のチョウが定着してきたのも、調査の期間と重なりました。



ツクバムラサキトビムシ

展示は、茨城県の“生きもの”とそれを育む“大地”の姿を、博物館が収蔵している膨大な資料の中から、選りすぐりの標本を通して紹介します。山川草木、森羅万象が“淀みに浮かぶ泡沫”のように消えてしまうことがないことを願いつつ…。(資料課 久松正樹)

会期 2007年10月20日(土)～2008年1月14日(月)
※10月20日(土)は午後1時から公開。
開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日、年末年始(12月28日～1月1日)
※ただし、12月24日(月)、1月14日(月)は開館し、翌日が休館となります。
11月12日(月)は開館し、振替休館はありません。
※11月13日は、無料入館日です。

●自然報告会「茨城の自然報告会」

演者：“総合調査”調査員及び当館職員
日時：1月13日(日) 10:00～15:00
場所：博物館内 定員：100名(中学生以上：先着順)

●自然講座「いばらきの自然再発見 トークセッション」

スピーカー：廣瀬 誠氏(ヒヌマイトトンボ発見者)
神原千恵氏(NHK水戸放送局キャスター)
秋山昌範氏(牛久市在住グラフィックデザイナー)
日時：10月20日(土) 13:30～15:00
場所：博物館内 定員：300名(小学生以上：先着順)

●大人&子どもフィールドガイド「八溝山の紅葉」

大人コース(中学生以上)：紅葉と晩秋の植物を観察しよう
子どもコース(小学生のみ)：もじのコレクションをつくらう
日時：11月11日(日) 10:00～14:00
場所：大子町 定員：各コース30名(抽選)
※詳しくは博物館ホームページをご覧ください。

里山の豊かな恵み

里山環境学習サポート事業

「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは…」これは、昔話「ももたろう」に出てくる懐かしのフレーズです。昔から、人が里の近くの山（里山）を利用し、雑木林などで木の枝を集めていた証でしょうか。かつて、農山村の人々は雑木林や谷津田を上手に利用していました。しかし、薪や炭、落ち葉の堆肥があまり使われなくなると、人と里山とのかかわりが次第に薄れ、手入れのされない荒廃した里山が多くなりました。今回は、里山の自然を維持することで得られる豊かな恵みを3つほど紹介します。

雑木林の林床の落ち葉はかき集められて、堆肥づくりに利用されます。マスとよばれる囲いの中に貯められた落ち葉は、発酵によって腐葉土に変わり、田畑の肥料として使われました。

クヌギやコナラは伐採されて薪や炭にされ、風呂炊きや料理の熱源として使われました。今では、石油やガスに取って代わられていますが、炭のもつ消臭、防湿、水の浄化作用等の優れた機能が見直され、燃料以外でもさまざまなところで活用されています。

また、適当な太さのクヌギやコナラは伐採され、シイタケなどの栽培にホダ木として利用されます。晩秋の頃に伐採された木は、乾燥させたのちに植菌され、



ホダ木から出たシイタケ

林の中の湿った環境下に置かれます。翌年の秋頃からキノコが収穫できるようになります。

手入れのされた里山は、たくさんの豊かな恵みを私たちにもたらししてくれます。高度経済成長期に、生活様式が大きく変わったことで、人々は里山の自然から離れてしまいました。しかし、多くの環境問題が噴出する今だからこそ、里山のもたらす恩恵を再認識し、人と里山との新しいかかわり方を考える必要があるのかもしれない。（教育課 湯原 徹）

県内の里山で活動する団体を紹介します！

◆嘉家佐和西山の会（かげさわにしやまのかい）

発足：平成 17 年 11 月 13 日

会員数：30 名（平成 19 年 4 月現在）

代表者：正根寺英夫（筑西市嘉家佐和）

所在地：筑西市嘉家佐和

面積：約 2ha

植生：湿地と雑木林

主な活動：不法投棄された大量のゴミを自治会で処理したことをきっかけに活動が始まりました。下草刈りや間伐などの整備を定期的に行うことで、明るい光が差し込む昔懐かしい里山の姿が戻りつつあります。子どもたちといっしょに鳥の巣箱を設置したり、動植物の観察会を行っています。



木道整備作業のようす

（提供：嘉家佐和西山の会）

それぞれの秋・読書

秋は芸術・文化の季節です。そして読書の季節でもあります。読書は人それぞれの流儀があることでしょうが、若いころは一冊の本を常に持参し読み、次の本に移りましたが、今では3ないし4冊を同時並行的に読んでいます。専門書は早朝に、哲学書はトイレでと場所や時間帯で読み分けます。海外へ行くときは必ず時代劇ものを持参しています。今、若い人の読書離れが心配されていますが、確かに電車の中などでは携帯

電話で器用にメールを打つ光景が多く見られ、読書をしている人は少ないようです。読書の効用については今更申すまでもないことですが、パソコン、携帯時代の若い人は、作文や漢字の読み書きは苦手なのではと邪推し、心配しております。本を読めば知識が増え、体験すれば知恵が増えるといわれます。少しメールの手を休め、ページをめくってみてはいかがでしょう。

人生を豊かにする新たな発見との

コラム by director SUGAYA

出会いがあるかもしれません。



イラスト：福本陽子（ミュージアムコンパニオン）

ニュージーランド環境保全局とその職員グラハム氏について

第40回企画展「キア・オラ！ニュージーランド」では、ニュージーランドのユニークな生物相とともに、そうした在来の生きものたちの生存を脅かす外来種についても紹介しました。また、外来種問題への真っ向からの取り組み例として、ニュージーランドの政府機関である環境保全局（通称「ドック」：DOC=Department of Conservation）の活動を取り上げました。

ドックは、1987年4月1日に誕生した比較的新しい機関で、ニュージーランド政府の林野部、土地調査局、野生動物部、歴史的景勝地トラストの古生物部門などから集められた職員によって発足しました。その職員構成からも想像できるように、ドックの使命は、「ニュージーランドの自然と歴史的遺産を現在そして未来にわたり享受するために保護すること」と定められています。外来種管理も重要な業務のひとつで、ポッサム、イタチ類、シカ類などをはじめとする様々な外来



来日した際に日光国立公園のツキノワグマ調査地を訪れたペテ・グラハムさん

生物に対して、根絶や抑制計画を実施しています。

発足当時の常勤職員数は1,111人でしたが、2006年時点での常勤職員数は1,670人と年々増加してきています。またこうした常勤職員以外にも、300～600人程度の

非常勤職員が雇用されています。国土の総面積が日本の約2/3、総人口が400万人の国（ちなみに茨城県は人口約300万人）で、これだけの数の政府職員が雇用されていることにまず感心してしまいます。環境保全にかかる予算も大きなもので、例えば外来種管理では年間80億円の予算が計上されています。



ファンガレイ・キーウィ保護区で若いキーウィの生育状況をモニタリングするペテ・グラハムさん

北島ファンガレイ事務所勤務するレンジャーのペテ・グラハムさんも職員の一人で、キーウィの保護活動に長年従事しています。今回の企画展では来日して講演などもしてくれましたが、外来種の問題も含めて、ニュージーラ

ンドで環境保全の障害となることの多くには今でも人間が絡んでいるといいます。言い換えれば、私たち人間への普及啓発活動がスムーズに行われ、人々からの保全活動（例えば外来種駆除への合意や飼い犬の適切な管理など）への同意が得られれば、問題の多くは解決に向けて動き出すということです。またこうした側面からのアプローチが、現在ドックで力を入れて取り組んでいることだそうです。日本でも参考にしたい部分ですね。（教育課 山崎晃司）

アカトンボ

「夕焼けこやけの赤とんぼ～♪」
みなさん一度は口ずさんだことがあるのではないのでしょうか？

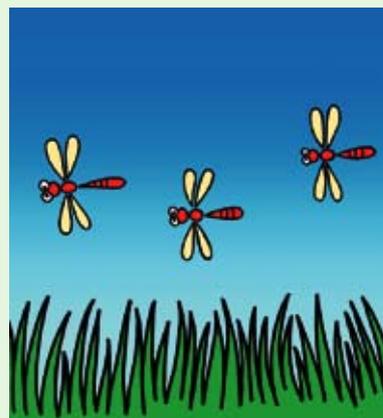
私たちの身近にいるアカトンボ。でもこのアカトンボ、最初から赤い色はしていません。私たちがよく目にするのはナツアカネとアキアカネで、夏場はうすいだいだい色をしています。夏になるとナツアカネは水辺近くの森や林で過ごし、アキアカネは群れで山を登り夏の間山で過ごします。きっと暑い夏をのりきるた

めに、涼しい場所を求めていくのでしょう。そして、秋になるとアキアカネは群れで山を下り生まれた場所に戻ってきます。その姿はまぎれもなく“赤とんぼ”。

博物館の“とんぼの池”にはその名の通りたくさんのトンボたちがやってきます。その中には長旅から帰ってきたアカトンボの姿も……。ぜひ皆さんも真っ赤な“赤とんぼ”を見に来ませんか？

（ミュージアムコンパニオン 羽富阿紀）

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー



火山活動が活発だった中新世の茨城

第I期総合調査から

当館では、県内の自然に関する資料や情報を集積する総合調査を行っています。地学分野では、地質や岩石、化石、テフラ（火山噴出物）層序や微気象などについて調査してきました。ここでは、12年間にわたる第1期総合調査の成果の一端を紹介します。

〔火砕流に襲われていた中新世の奥久慈〕

平成3年に雲仙普賢岳で発生した火砕流を覚えている方も多いと思いますが、この火砕流が、はるか過去には茨城でも発生していたことはご存知でしょうか。

大子町大沢口には、白っぽい軽石質凝灰岩からなる高さ40mほどの崖があります。これは、約1670万年前（新生代中新世）に爆発的な火山噴火に伴って火砕流が発生し、この地を襲ったときに堆積してできた岩石です。今回の調査で、この火砕流が短期間に何回もこの地を襲っていたことが明らかになりました。同じ火砕流堆積物は常陸大宮市や栃木県茂木町でも確認されています。では、この火砕流はどこから来たのでしょうか？当時の大子町では、他にも活発な火山活動がありました。しかし、岩石組成や年代測定による研究から、火砕流は西にやや離れた茂木地域で起こった噴火で発生し、流れてきた可能性が指摘されています。



1670万年前の火砕流堆積物

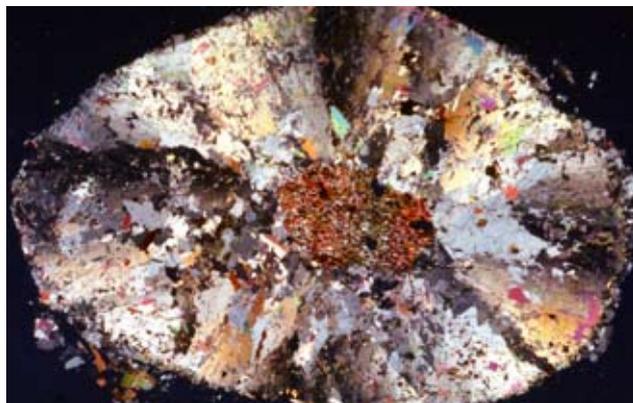
なお、この調査中に、火砕流に挟まれた砂岩層から足跡化石が偶然発見されました。後の調査で、シカ類や鳥類のものと推定される足跡化石が約150個確認され、当時の動物の様子を知る貴重な資料となりました。



発見されたシカ類の足跡化石

〔球状花崗岩—マグマと混じらなかった液〕

石岡市峰寺山の山腹では、5cm前後の球が花崗岩の中に密集している球状花崗岩（小判石）とよばれる岩石がみられます。調査では、露頭での産出状況や球の内部構造と化学成分についてくわしく調べました。球には放射状の堇青石や粒状の燐灰石などの鉱物からなる層構造がみられます。そして、周囲の岩石がマグマの中に融けていくときに、融けた液の一部がマグマと混じることができず、マグマの中で液体の球となっていたことがわかりました。（資料課 小池 渉）



球状花崗岩（堇青石球果）の内部構造（偏光写真）

お腹？背中？

水槽に貼り付いている魚は、コバンザメです。名前に“サメ”とついていますが、硬骨魚類なので軟骨魚類であるサメの仲間ではありません。ところで、この貼り付いている面を、お腹？背中？と迷ってしまいませんか？実は背中側です。コバンザメは、頭上にある小判型の吸盤を使って吸着しています。この吸盤は卵から生まれた時にはなく、2～3cmほどに成長すると、背ビレが変形してできるものです。

この魚は、サメやウミガメなどの大型生物に吸着し、敵から身を守ったり、餌のおこぼれを食べたりしながら生活しています。しかし当館のコバンザメは、同居している自分より大きなドチザメに一度は吸着したものの、サメが嫌がるため居心地が悪くなったのが、サメから離れて水槽のガラス面に貼り付く様になってしまいました。

来館の際には、水槽に貼り付いている姿や、餌の時間に泳ぎ回る姿を

おさかな通信

見て、お腹と背中を確かめてみてください。（水系担当 廣瀬南帆）



水槽に貼りつくコバンザメ

ニュージーランド展において採集・作成した外来種標本

貴重な海外資料が、当館の収蔵品に加わりました。ニュージーランドで収集した外来種を中心とした哺乳類と維管束植物の標本です。これらの標本は、第40回企画展「キア・オラ！ニュージーランド～キーウィと人がくらす島～」の展示のために収集したものです。

哺乳類は、いずれもニュージーランド環境保全局が、南島のオタゴ半島で駆除したもので、イズナ2点、オコジョ2点、フェレット1点の合計5点を冷凍した

環境保全局での冷凍個体の確認のようす（下）と完成した剥製と骨格標本（右）
手前からイズナ、オコジョ、フェレット



状態で譲り受けました。それらを、日本で剥製と骨格標本にして、10点を収蔵しました。

植物標本は、私たちの現地調査の際、国道や牧場沿いの道ばたで採集したものの約160点です。そのほとんどが日本と共通する外来種でした。また、日本の在来種であるスイカズラが外来種としてニュージーランドで大問題になっていますが、これも日本に再び里帰り？し、標本として収蔵されました。

日本だけでなく、外国でも外来種が大きな問題になっていることなどを示す貴重な資料として、今後も有効に活用していく予定です。（資料課 栗栖宣博）



外来植物のさく葉標本 左よりスイカズラ、ナガエツルノゲイトウ、シロツメクサ

特定外来植物(アゾラ・クリスタータ)

「あれ？とんぼの池が無くなっちゃった。」と勘違いするほど水面を覆いつくす褐色の浮草に驚かれた方が多いと思います。まるで絨毯を敷いたようです。

ご年配の方は「オオアカウキクサ懐かしいね。」と思われたかもしれません。在来種のオオアカウキクサはかつては秋から冬にかけて水を張った水田で見られましたが、現在では絶滅危惧種に指定されています。とんぼの池の浮草はじつは帰化植物のアゾラ・クリスタータです。輸入された観賞用の水生植物に紛れこんだり、アイガモ農法のアイガモの餌に利用されるよう



水面がアゾラ・クリスタータに覆われたとんぼの池

になり、日本国内に広まりました。オオアカウキクサもアゾラ・クリスタータもシダ植物のアカウキクサ科に属します。

好む生育環境が似ているため競合し、オオアカウキクサなどの在来種が減少する可能性があります。また、在来種との交雑種も確認されています。生態系への被害を防ぐためアゾラ・クリスタータは特定外来生物※に指定されています。（資料課 小松崎茂）

※特定外来生物

外来生物（移入種）のうち、特に生態系等への被害が認められるものとして、外来生物法によって規定された生物。



アゾラ・クリスタータ

トピックス

○「キア・オラ！ニュージーランド」展 オープニングセレモニー

7月14日（土）に第40回企画展「キア・オラ！ニュージーランド～キーウィと人がくらす島～」オープニングセレモニーを開催しました。当日は台風4号の接近による荒天にもかかわらず、駐日ニュージーランド大使のイアン・ケネディ氏をはじめ、たくさんの来賓の方々にご出席いただき、盛大なセレモニーとなりました。また、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワのセドン・ベニントン館長とニュージーランド環境保全局キーウィレンジャーのペテ・グラハム氏がはるばるニュージーランドから駆けつけ、企画展の幕開けに華をそえました。

午後からは、自然講座「ニュージーランドの自然とその保護活動」を開催し、ベニントン館長、グラハム両氏から、ニュージーランドの個性豊かな自然の姿や、キーウィ保護活動の現場の様子をお話いただきました。日本ではなかなか聞くことのできないテーマだけに、参加者のみなさんは熱心に話に聞き入っていました。（企画課 佐川三輪子）



「キア・オラ！ニュージーランド」オープニングセレモニー

○世界のカブトムシ・クワガタ大集合

「世界のカブトムシ・クワガタ大集合」と題し、当館野外施設の自然発見工房において、「甲虫展」を開催しました。

世界のカブトムシやクワガタムシの標本のほか、ヘラクレスオオカブトやコーカサスオオカブト、ギラファノコギリクワガタなどの生きている甲虫も展示しました。また、甲虫の拡大模型なども展示し、からだのしくみを観察することもできました。

夏休み時期に合わせて開催した「甲虫展」ですが、梅雨明けが遅れたこともあり、開催当初は少なかったお客様も、8月になって梅雨明けを待っていたかのように多くなり、多くの方々に喜んでいただくことができました。生きた甲虫に歓声をあげ、それぞれに観察しながらスケッチしたり、夏休みの自由研究にするのか熱心に観察したり、汗をかきながらカブトムシた

ちに見入っている子どもたちが多くいました。

これからも、来館される皆様からのご意見をおうかがいしながら、楽しみながら学べる展示を行っていきたく考えています。皆様のご来館をお待ちしています。（企画課 木村 功）



世界のカブトムシ・クワガタ大集合

○入館者600万人を達成しました。

当館では、平成6年11月13日に開館して以来、毎年40万人を超える来館者をお迎えしてきましたが、去る8月23日（木）午前11時20分頃に、600万人目のお客様をお迎えすることができました。開館から、およそ12年9か月での達成であり、日本の自然史系博物館としては異例の速さでの達成となりました。

記念すべき600万人目の来館者は、東京都文京区からお越しの船橋悠太郎君（4歳）で、当館の菅谷博館長から記念の入館者証が手渡されました。さらに悠太郎君には、橋本昌茨城県知事、堀内孝雄博物館友の会会長から、理科実験セットなどのたくさんの記念品が渡されました。

悠太郎君のお父さんによりますと、今回が、初めての来館で、「職場の仲間からは、とても良いところと聞いて来館したので、これから見学するのをとても楽しみにしています。」とのコメントを寄せていただきました。当館はこれからも、皆様に楽しんでいただける展示やイベントを用意してお待ちしておりますので、ぜひお越しください。（企画課 永濱隆之）



入館者600万人達成！

「ニュージーランドをまるかじり」の一日!



マオリのダンスショー

当館では8月26日(日)を「ニュージーランドデー」としてニュージーランドを身近に感じることのできるたくさんのイベントを開催しました。

「ミニセミナー&クイズ」では、ニュージーランド政府観光局とニュージーランド航空のスタッフの方々が、ニュージーランドの魅力^{みりょく}を分かりやすく紹介しました。イベントの最後に参加者全員にかわいいプレゼントが配布され、これには子どもたちも大喜びでした。

工作教室「毛糸でキーウィを作ろう」では、飛べない鳥キーウィのマスコット作りを行いました。参加者のみなさんは毛糸の扱いに苦戦しながらもそれぞれ個性豊かな表情のキーウィを作っていました。

また、恐竜ホールでは、物産展コーナーを一日限定で開設し、ニュージーランドならではのグッズを買い求めるお客様でにぎわいました。

そしてこの日、なんとといっても目を引いたのは「マオリのダンスショー」です。日本在住のマオリダンスグループ「ナ・ハウ・エ・ファー」(マオリ語で“四方から吹く風”の意味)のメンバーが全国から集まり、戦闘の前に士気を高めるための踊りとされる「ハカ」など、伝統のダンスを披露しました。気迫の踊りに会場は熱気に包まれ、観客のみなさんはマオリの世界に引き込まれていました。また、ダンサーたちが独特の衣装で、館内を練り歩く一幕もあり、観覧中の方々を驚かせていました。博物館にニュージーランドの風が吹いた一日でした。(企画課 佐川三輪子)

編集後記

今年は、なかなか明けぬ梅雨、猛暑日の連続、台風の直撃と自然の力を感じさせられた夏でした。自然といえば、12年にわたり茨城県の自然を調査した結果を報告する企画展が10月20日から開催されます。皆さんも茨城の自然を感じてみませんか。(I.K)

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日の入館料は無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※11月12日(月)は開館し、振替休館日はありません。
※12月24日(月)、1月14日(月)は開館し、翌日が休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A-MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2007年9月25日
〒306-0622 茨城県茨城東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。